ひめゆり平和祈念資料館

資料館だより

第41号

2008.5.31

目　次

●資料館トピックス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
仲宗根政善生誕百年記念シンポジウム／虹の会主催・中高校生戦跡めぐり／証言員戦跡めぐり／「南風原平和ガイド」学習会／県内学校団体の入館無料に／2008（平成20）年度年間行事予定表
●統計にみる2007年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
●ひめゆり研究ノート／①赤心の塔・・・・・・・・・・7
●ひめゆり学徒隊の戦跡／No.1津嘉山の第三十二軍司令部壕・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
●仲宗根政善日記抄(39)・・・・・・・・・・・・・・・・11
●本棚・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
●来館者一人ひとりが記憶の伝え手に・・・・・・14
●コラム「相思樹」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
●声(埼玉県　教員)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

資料館トピックス

◆「仲宗根政善先生　生誕百年記念シンポジウム」開催される

昨年はひめゆり学徒隊の引率教諭だった仲宗根政善先生の生誕百年の節目の年でした。仲宗根政善先生は 1907（明治 40）年に生まれ、東京帝国大学卒業後、沖縄県立第三中学校の教諭を経て女師・一高女で教鞭をとり、戦後は琉球大学教授としてライフワークの方言研究に取り組みました。一方、ひめゆり学徒隊の引率教師として戦場を体験し多くの教え子を失った悔恨から生涯平和を訴え続けた方です。当館の初代館長でもあります。

仲宗根先生の生誕百年を記念し、沖縄言語研究センター・おもろ研究会・ひめゆり平和祈念資料館共催の「仲宗根政善先生　生誕百年記念シンポジウム」が 2007（平成 19）年 12 月 8 日、琉球大学付属図書館の多目的ホールで開催され、ご家族はじめ仲宗根先生の薫陶を受けた教え子やゆかりの方々が一堂に会しました。

沖縄大学教授比嘉政夫氏の開会の挨拶ではじまり、琉球方言研究クラブから琉球大学 2 年生の當山奈那さん（代表発表）が「八重山白保方言のリズム＝アクセント的構造」、おもろ研究会から照屋理さんが「『おもろさうし』にあらわれる神々－神名を中心に－」というテーマで発表しました。当館からは説明員の尾鍋拓美が「『ひめゆり』はどのように表象されてきたか」のテーマで発表を行い、同じく説明員の仲田晃子がコメンターを務めました。それぞれの発表に対して活発な質疑応答がなされ、最後に琉球大学名誉教授の上村幸雄先生が、仲宗根政善生誕百年を機に先生から学ぶことは何か、特定の情報だけではなく真実を知ることの大事さを訴え、21 世紀に生きる私たちは何をなすべきかを問いかけて盛会のうちに幕を閉じました。

発表に聞き入る参加者の方々

当館説明員の仲田晃子・尾鍋拓美

◆ひめゆり学徒隊生存者と中高校生との座談会（虹の会主催）

虹の会主催の中高校生対象戦跡フィールドワーク「Now or Never ～やるなら今だ！」が 2007（平成 19）年 12 月 15 日に開催されました。昨年、高校教科書の検定意見をめぐり、沖縄県内外で大きな問題となったことを逆手にとり、中高校生に沖縄戦を学習してもらういい機会だとして企画され、今回の学徒生存者との座談会はそのスケジュールのひとつとして行われたものです。出席者は虹の会メンバー５名、中高校生 11 名（首里高等学校、那覇西高等学校、久米島高等学校、東中学校）、ひめゆり学徒隊生存者４名の計 20 名です。

参加した中高校生から「自分の口で戦争体験を語っていくことに自信がない」「戦後 50 年以上も証言してきて、内容はところどころ変わっていないのですか」などの質問があり、それに対して生存者からは「資料館の説明員ふたりも、生存者から話を聞いたり本を読んだりして勉強している。みなさんも話を聞いたり本を読んだりして勉強してほしい」「追体験することが大事。おおいに追体験してください」、「（戦争の）記憶が消えていくことはない。消そうにも消えない。だんだん濃くなってくる」と回答がありました。

また生存者からは、「（沖縄戦当時は）日本が追い詰められているとは思わなかった」「教科書で徐々に『戦争はかっこいい』という意識が作られてきた。若いみなさんは、どう動けばいいのか、しっかりとした眼を持たなければならない」と若い世代に対してのアドバイスも聞かれました。

今回出席した東中学校の生徒さんたちは「集団自決」教科書検定意見撤回のために東村議会に意見書を提出し、教科書検定意見撤回の県民大会にも参加したそうです。こうした若い世代の積極的な取り組みに、ひめゆり学徒の生存者は「頼もしい」「これからの時代の若い人たちががんばってくれて嬉しい」と、エールを送っていました。

真剣な中にもなごやかな雰囲気が…

参加者全員で

◆証言員の戦跡めぐり

当館で証言活動を行っている証言員（ひめゆり学徒生存者で構成）から「当館に訪れる修学旅行生はマヤーガマや轟壕など、いろいろな壕に入って平和学習をしている。証言員として資料館で来館者に話をしている以上、それらの壕や戦跡の勉強もしたい」という希望があり、2008（平成20）年２月４日（月）、「沖縄戦の南部戦跡を巡見する戦跡めぐり」が行われました。沖縄国際大学講師の津多則光氏の案内で、潮平権現洞－轟壕－ヌヌマチガマ－24師団第一野戦病院本部壕－「マルレ秘匿壕」を見学し、フシゾウアブ、クラシンウジョウなどは証言員の体力を考慮して車中説明となりました。

マルレ秘匿壕前で説明を受ける証言員

今回のように、証言員がそろって住民や他の学徒の壕を見学するのは初めてのことです。

実施後、証言員から「ひめゆり以外の戦跡を学んだことにより資料館内での証言活動にもプラスになる」「ただ見るだけよりも、きちんと説明を受けることでより一層理解が深まった」と感想があり、充実した戦跡めぐりとなりました。

潮平権現洞内で

◆南風原平和ガイド学習会

2007（平成19）年２月20日（水）、「南風原平和ガイド」の「ひめゆり関連戦跡めぐり」に、当館の学芸員が講師として参加しました。南風原町は沖縄陸軍病院壕を平和学習に活用してもらおうと、陸軍病院の第二外科20号壕を整備、公開しています。「南風原平和ガイド」とは、20号壕を訪れる人たちへの説明を行うガイドの方たちのことです。昨年１月、南風原文化センター主催で講座を開講、２期生まで69名が受講し、現在約30名が毎日交代でガイド活動をしています。

今回の戦跡めぐりは、ガイド活動をより充実させるための学習会として計画されたそうです。巡見した場所は、南部撤退後のひめゆり学徒隊の戦跡である波平第一外科壕、糸洲第二外科壕、伊原第一外科壕、山城本部壕、荒崎海岸などです。参加者からは、糸洲第二外科壕内部の大きさや、荒崎の碑が再建されたのはいつか、碑に刻まれている歌についてなどの質問がありました。また、資料館ではひめゆり学徒隊生存者の上原当美子さんが当時の体験を話し、みなさん熱心に耳を傾け、メモをとっていました。

荒崎海岸での説明

熱心に説明を聞く平和ガイドのみなさん

◆県内学校団体の入館が無料に

2008（平成20）年４月１日より、沖縄県内の小学校・中学校・高等学校の学校団体の入館が無料になりました。県内の児童・生徒のみなさまが平和学習を行う際、当館をよりご活用いただきたいとの趣旨からです。平和学習の場としてご利用いただければ幸いです。

なお、無料入館の適用には申請が必要です。詳しくはひめゆり平和祈念資料館（TEL 098－997－2100）までお問い合わせいただくか、ホームページ（http://www.himeyuri.or.jp/）をご覧ください。

◆ 2008（平成20）年度 年間行事予定

今年度の行事予定は以下の通りです。9月末頃～2月頃までは修学旅行が多く、館内が混雑されることが予想されます。

月	予	定
5月	31日	『資料館だより』第41号発行、『年報』第19号発行
6月	1日 23日 〃	ひめゆり平和祈念資料館資料集４『沖縄戦の学徒隊』発行 ひめゆりの塔慰霊祭（資料館の入館無料） 『感想文集ひめゆり』第19号発行
8月	1～31日 13～15日	学芸員実習実施 夏休みビデオ上映会（「平和への祈り」約25分） 旧盆のため証言員による館内説明お休み
9月	30日	ひめゆりガイド講習会実施（バスガイド・タクシー運転手への説明会）
11月	30日	『資料館だより』第42号発行
12月	30・31日	証言員による館内説明お休み
1月	1～3日	証言員による館内説明お休み
3月	25～4月6日	春休みビデオ上映会（「平和への祈り」約25分）

統計に見る2007年度

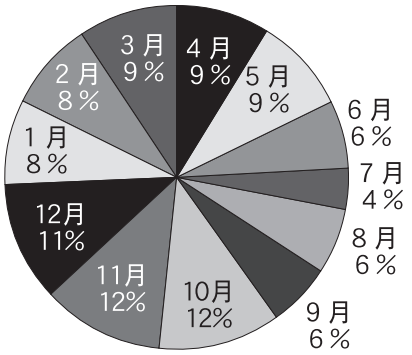
1．総入館者

・昨年の入館者は 869, 976 人（前年の 911, 033 人より－ 41, 057 人）。1 ヶ月の平均入館者は 72, 498 人、1 日平均は 2, 390 人。
⇒開館後 9 番目に多い入館者数。
・開館以来 19 年間の 1 か年の平均入館者数は　817, 032 人、1 日平均は 2, 279 人
・昨年の 9 月で開館以来の入館者が 1, 500 万人を超えた。

2．月別入館者

・昨年 1 年間で入館者の多かった時期は修学旅行の入館の多い 10 ～ 12 月の 3 ヶ月間。3 ヶ月間の合計は 297, 432 人で、総入館者数の約 34%
・逆に少ない時期は 7 ～ 9 月。この時期は夏休みで家族づれの姿が目立ち、団体入館が少ない。3 ヶ月間の合計は 139, 140 人で、総入館者数の約 16%

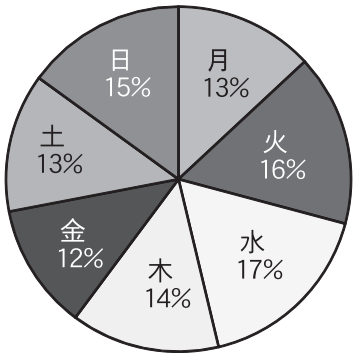
2．月別入館者状況



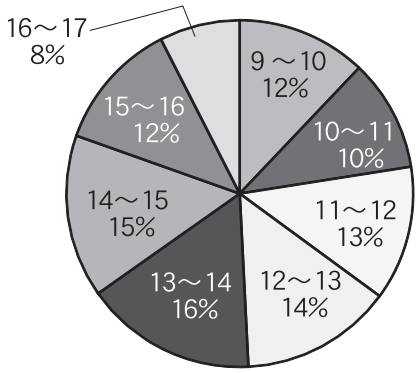
3－1．曜日別入館者数／3－2．時間帯別入館者数

・曜日別入館者数、時間帯別入館者数はほぼ平均している。
曜日別：月 13%、火 16%、水 17%、木 14%、金 12%、土 13%、日 15%
・時間帯別入館者数：12 時から 15 時までの午後早い時間の入館が多少多い。

3－1．曜日別入館者状況



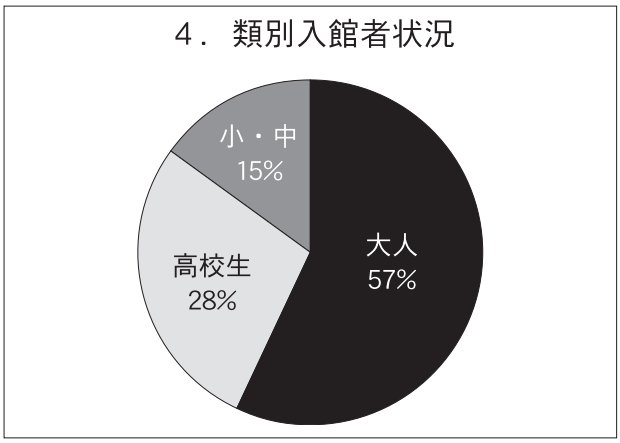
3－2．時間帯別入館者状況



4. 類別入館者数

【総数】昨年度の割合は大人が 57%、高校生 28%（そのうち約 96%が団体で来館）、小・中 15%（そのうち約 73%が団体で来館）。19 年間の平均では大人 70%、高校生 20%（そのうち 94%が団体で来館）、小中 10%（そのうち約 60%が団体で来館）

【団体】昨年度の団体の割合では、特に高校生の割合が高く 58%、次いで中学生 22%、大人 17%、小学生 3%となっている。19 年間の平均では高校生が 55%、大人が 28%



5．学校団体の入館状況

・昨年、修学旅行で来館した学校は 2,306 校、315,369 人（前年の 2,359 校、328,453 人に比べ－ 53 校、－ 13,084 人）。内訳は、小学校が 84 校の 4%、中学校が 842 校の 36%、高校が 1,380 校の 60%

・学校団体地域別

＊全体では、関東 29%、近畿 16%が多い。

＊小学校は、沖縄 60%、九州 19%、関東 13%がベスト 3（前年は沖縄 59%、九州 19%、関東 13%）

＊中学校は近畿 34%、中国 18%、九州 17%がベスト 3（前年は近畿 35%、九州 19%、中国 18%）

＊高校は関東 45%、東海 15%、信越 10%がベスト 3（前年は関東 43%、東海 14%、東北 11%）

・学校団体都道府県別

＊小学校　84 校のうち沖縄が 50 校とダントツ。

＊中学校は大阪 124 校、兵庫 87 校、岡山 74 校、熊本 57 校がベスト 4

＊高校は東京 179 校、神奈川 116 校、埼玉 85 校、長野 73 校がベスト 4

⇒中学・高校とも沖縄県は 1%前後しか入館していない。

・月別では 10 月 19%、12 月 18%、11 月 15%、5 月 12%が多く、その 4 ヶ月間で全体の 64%が入館している。沖縄の学校の割合が多い小学校は、6 月 27%、5 月 19%、11 月 13%が多く、近畿や九州、中国の学校の割合が多い中学校は 5 月 40%、4 月 24%に集中、高校は 10 月 26%、12 月 22%、11 月 19%の 3 ヶ月間に集中している。

6．入館料免除

団体 99 団体／修学旅行下見 906 校

身障者・旅行者等研修　1,521 人／介助・引率者　799 人

7．外国人　　5,080 人

ひめゆり研究ノート

① 赤心の塔

「赤心の塔」は、伊原第三外科壕に入っていた地元住民である大田一家の慰霊の塔である。沖縄陸軍病院が伊原第三外科壕（ひめゆりの塔の洞窟）に撤退してきたときには、そこには地元の住民が入っていたが、住民たちは陸軍病院の先発隊によって、壕を追い出された。しかし、大田一家だけは、そのままその壕に留まることができた。大田一家に嫁いだトシさんの弟にあたる徳元孝助さんによれば、その経緯はこうである。徳元さんは、中国への出征の経験があり、当時、農会[*1]の技手をしていた。

「姫百合の壕を追い出されたのは六月初旬頃である。姉トシの家族は、夫は防衛隊に召集され、年老いた夫の母と五歳を頭に三人の子供を抱えていた。私は通信隊長に話をして、壕の片隅にそのまま置いてもらった。軍に迷惑にならないという約束通り、弟の孝栄と二人で朝晩食事等の世話をした。」（徳元孝助『人生のわだち』ｐ38）

「『自分たちの壕[*2]は狭いので、全員は入れません。決して迷惑はかけません。食事も運んできますから、４人をここに置かせてください』と通信隊長に頼んだら、隊長は『昼間壕の出入りなどをしなければ置いてもよい』と壕に残すことを許してくれた」（2008年５月６日、電話による徳元さんへの取材より）

また、６月18日のことを、徳元さんはこう書いている。

「六月十八日未明、トシの夫一夫（ママ）が家族のいる姫百合の壕に帰って来て、夫婦で私達を呼びに来た。『真栄里、伊敷まで敵が来ている。早く摩文仁海岸まで逃げよう』と話している時に、壕の上で弾の音がカチカチと聞こえた。私が『この音は弾が落ちる音ではない。銃の引き金の音だ』と言うと、一男[*3]兄はびっくりして『皆な早く来いよ』と言って、母や子供のいる壕に走り出したが、10メートルも行かない所で、一男兄が倒れるのを目の前で見たので、私はすぐ壕に引っ込んだ。そのことは恐くて誰にも話せなかった。一男兄が走って行った後、『敵は上に来ている』と言ったら、皆な恐くなってうずくまって誰も言葉が出ない。夜は白々と明けて壕の入口が明るくなった。敵は壕の上を自動小銃を発射しながらガヤガヤと何度も通り過ぎて行く。もう絶対絶命だと思い、互いの顔を見ると悲しくなって涙が出てくる。（中略）暗くなったのでおそるおそる壕を出てみると、姫百合の壕の入口いっぱいに火が燃え上がっている。それを見てトシ姉は走りだし、壕に飛び込もうとする。私も走ってついて行き、『仕方ないよ、騒ぐな』と、トシ姉の手を引っぱった。東方100メートルぐらい行ったところで、曳光弾がパラパラ飛んで来て母がやられた。（後略）」（徳元孝助『人生のわだち』ｐ43）

この時の「ひめゆりの塔の壕の入口いっぱいに火が燃え広がっている」というのが、米軍による６月19日朝のガス弾攻撃のことだと思われる。その時の攻撃で、おばあさんと３人の子どもたち[*4]はひめゆり学徒隊や陸軍病院関係者とともに死亡した。

戦後間もない1948（昭和23）年、トシさんと徳元さんらが仲宗根政善先生にお願いして慰霊の塔「赤心の塔」[*5]（揮毫：仲宗根政善、刻字：徳元孝助）を建立した。塔には合計５名の家族（ナハ、一雄、義雄、繁子、貞雄）の名前が刻まれている。

戦後、トシさんは、毎年６月18日ごろに、「赤心の塔」に子どもの好きなお菓子をお供えしてお参りしていたが、1990年代半ばごろに他界した。

（ひめゆり平和祈念資料館　学芸員　普天間朝佳）

＊１　農事改良をはかる目的で設立された公法上の社団法人。（広辞苑）

＊２　徳元さんたちが入っていた壕は伊原第三外科壕の近く、現在の土産品店・ひめゆり会館の駐車場にあったという。

＊３　徳元さんは一男と書いているが、赤心の塔には一雄と刻まれている。

＊４　これまで伊原第三外科壕で亡くなったのはおばあさんと一人の子どもと言われていたが、実際には３人の子どもが亡くなったようである。

＊５　赤心とは嘘いつわりのない、あるがままの心。丹心。まごころ。（大辞泉）

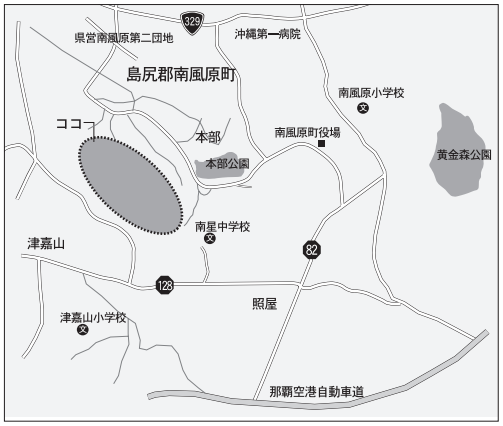
※「赤心の塔」は、ひめゆり平和祈念資料館正面玄関に向かって左側にある。

ひめゆり学徒隊の戦跡

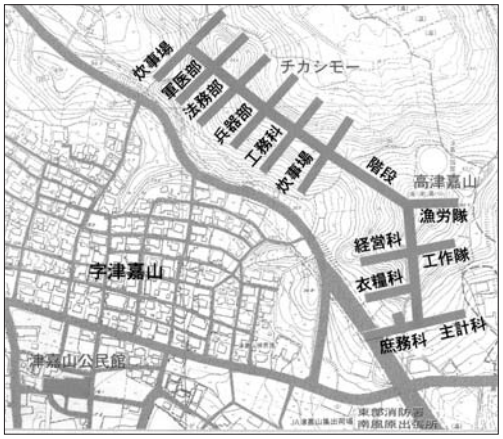
No. 1　津嘉山の第三十二軍司令部壕

所在地：南風原町津嘉山
規　模：全長約 2,000 m（高さ 2 m × 幅 2 m）
部　隊：第 32 軍司令部の経理部（経営科、主計科、衣糧科、庶務科、工務科《築城班工作隊》）、獣医部、兵器部、法務部、軍医部、漁労隊

①チカシモー南西側の丘陵を切り開いた現場。



▲津嘉山の軍司令部壕のあった場所



▲第 32 軍司令部経理部壕内部図
（『南風原の語る沖縄戦』より）

(1)　概　要

・津嘉山の第三十二軍司令部壕は、南風原町津嘉山の小高い丘に掘られた総延長約 2 千mの巨大な人工壕であった（人工壕としては沖縄一の規模）。
・丘の北側はチカシモウ、南側の高いところがタカチカザン（高津嘉山）と呼ばれている。
・その丘の地下に北西―南東の方向に 1 本の壕が掘られ、その壕の両側に経理部・軍医部・兵器部などの壕がムカデのように掘られていた。
・当初、沖縄守備軍（第 32 軍）の司令部壕として使用する予定であったが、壕の強度に不安がある、作戦を指揮するうえで見通しがきかないなどの理由で司令部（牛島司令官と参謀部）は首里に変更された。ここには司令部の経理部や兵器部、法務部、獣医部、軍医部などの将兵、軍属、学徒ら約 3 千人が配備されていたという。
・この壕は第 32 軍司令部の資金や物資を管理し、前線へと補給する最大の後方陣地となった。
・2006 年 2 月、新道路建設のため壕の一部が発掘され、南風原町により埋蔵文化財発掘調査が行われた。

(2)　この壕の特徴

・壕の地面に枕木（添え木）がある。壕がもろいからだろうと思われる。
・壕奥に向かって左側に排水溝が作られている。
・ぬかるんでいたからか、床に瓦の破片が敷かれている。

(3)　壕からの出土品

・アンプル、軟膏、カマ、のこぎり、杯、スンカンマカイ（沖縄の少し大きめのお碗）、茶碗、手榴弾、軍靴、イチジク浣腸。どういうわけか入口付近に軍靴が散らばっていた。

②今回は 30 mの区間が発掘調査された。

同壕の経理部に配置された宮城喜久子さんの証言より

・この壕には沖縄県立第一高等女学校3･4年生16人と引率教師３人が配属された。
・周りには三角兵舎が数多くあったので、軍司令部の兵隊たちは、当初そこに入っていたのではないか。
・この壕には魚介類の食糧確保が担当の漁労隊や工作隊の部隊も入っていた。漁労隊の兵隊は本土出身者で構成されていたが、漁労をやるような状況ではなく雑役をさせられていたようである。
・横壁にも板が張られ、土はむき出しにはなっていなかった。
・壕の外に発電機があって、最初の１週間ぐらいは壕内には電燈がついていた。
・生徒がいたのは庶務科の壕の入口。近くに経理部長専用の６畳ほどの部屋もあった。そこの出入り口近くにトイレがあった。
・炊事場は軍医部の近くにあって、近くには缶詰も積まれていた（そこに入っていた軍属の方の記憶では、炊事場は工務科と軍医部の近くにもあって、天井には排煙用の煙突もつくられていたらしい）。
・当初生徒たちは、水汲み、食糧収集などの雑役をやらされた。水は丘の下にある津嘉山集落の井戸（大きい井戸であちこちからつるべを下ろしていた）から汲んできて、経理部壕入口に向かって右側にあった数個のドラム缶に水を溜めた。それを司令部壕全体で使った。
・４月下旬戦局が悪化し、司令部壕の兵隊たちに負傷者が出ると、学徒たちはその治療や看護の任務をさせられるようになった。５月初めごろからは、32 軍司令部以外（山部隊＝第 24 師団など）の負傷者も運ばれてくるようになった。とはいえ、陸軍病院のように大量の負傷兵の看護に当たったわけではなく、負傷者は最大でも 30 人から 40 人ぐらいだった。
・衛生兵２名と学徒２名で各壕を回って負傷兵の治療をした。広すぎて回るのが大変だった。軍医部・法務部・兵器部など各部の壕に負傷兵が収容されていた。壕奥に向かって右側に負傷兵の寝台が連なっていた。寝台は一段だった。学徒は薬品箱を持って回った。調剤もした。
・勤務状態は陸軍病院のように寝る間もないという状態ではなく、２段の寝台に２名ずつ眠ることができた。夜間に食糧収集や水汲みを、砲弾の激しい昼間は休んだり、看護活動をしたりした。
・学徒たちの食事はおにぎりだった。ピンポン玉ではなく普通サイズのおにぎりだった。最初のうちは乾燥味噌を溶かした味噌汁も出た。
・この津嘉山の司令部壕で津嘉山出身の城間春子さん（一高女昭和 18 年卒、軍属）が砲弾で亡くなった。
・撤退直前の 3, ４日間、学徒たちは南風原の陸軍病院一帯を守備する兵隊たちのためにおにぎりを握った。それを防衛隊の人たちが運ばされていた。防衛隊の人たちは「たるんでいる」と、日本の兵隊によく殴られていた。
・5 月 27 日にこの壕に牛島満司令官ら第 32 軍司令部の首脳部が立ち寄った。牛島司令官は、経理部長の部屋に泊まった。
・撤退後、真栄平までは軍司令部壕の人たちはみんな一緒だった。学徒たちには真栄平で解散命令が出されたが、伊原まで撤退し、そこで陸軍病院に配属されていた学徒隊に合流した。

（ひめゆり平和祈念資料館学芸員　普天間朝佳）

参考文献：南風原町史編集委員会『南風原が語る沖縄戦』

③当時の様子を証言する宮城喜久子さん。周りを囲んでいるのは南風原文化センターのスタッフ。

仲宗根政善日記抄 (39)

1979 年 10 月 26 日

平良進君の遺稿刊行と「平良進さんの思い出」出版の集いが、貯金会館ホールで催された。六時のつもりで早く出かけたが、中島喜久雄君と山川光義君が来ているだけだった。やがて平良良松那覇市長と稲福金志氏が来た。

菊花が入口に準備されてあり、一本一本、設けられた祭壇の前にお供えした。でっぷりふとった平良君がゆったりと坐り、大きな眼をみひらいている写真がかざられてあった。愛用の壺であろう。写真の左右におかれてあった。

「古瓶どやしが幾年よ経てん肝可愛されて沙汰も残る」と、君は古い壺や瓶、甕類を愛し、沖縄の骨董も多く集めて賞玩してたのしんでいた。これらをかざってたのしむというよりは、むしろその中にうずもれていたのであった。私はしばらく君の死を知らずにいた。大宜見朝計君が琉生病院に入院しているというので訪ねたら、何、この通り元気だよ、今日平良君のところまでくやみに行ったのだというのではじめて平良君の死を知ったのである。なくなったような気もせず、君の霊前にぬかずくこともなしにすごして来たのである。

多くの沖縄の知名士が続々と会場につめかけて来た。君の交友の広いことを知り、友情の深かったことを感じながら、遺影をみつめていた。

あの大きな眼を私は忘れることが出来ない。

二十年の五月二十五日の朝未明、陸軍病院第一外科壕、七号壕で、入り口から奥の軍医のいたところへかけこんで来て、敵兵がすぐそこまで来ているがと、あの大きな眼を見開いて私に知らせてくれたのであった。軍医はすでに武装をととのえて壕を脱出する仕度をしていた。私も無意識にただ彼らのするしぐさをまねていた。彼はまもなく、壕を出て行ったが、私は生徒には何ら連絡もしていないことに気がついて、もとの位置にもどって来た。比嘉診療主任－彼は一中での同期生だった－があおむけになって、煙草をすぱすぱふかして、煙でまるく円をえがいている。その悠々たる態度にすっかりおちつきをとりもどし、あわてふためいていた自分がはずかしくなった。静かに彼は、私に語った。

支那戦線では、こんなときによくぶつかった。昼中はうろたえたりさわいだりなどしてはいけない。昼中はじっとしていて、夜になったら行動をおこすがよいと静かにいう。平良君も帰って来た。三名は静かに壕の奥で日のくれるのを待った。

平良君は、十月一日付で　沖縄陸軍病院　陸軍歯科医として勤務した。午前中勤務して午後は自分の家に帰って歯科の治療をしたようである。

泉崎にあった済生会病院　陸軍病院第一外科に勤務し、比嘉中尉のもとで働いた。

彼は比嘉中尉を軍医の権化と言っていた。彼は、支那大陸・歴戦の勇士・温厚篤実そうして勇敢な人として、すでに私も病院内での風評を聞いていた。

米軍による沖縄初空襲のこの日にみた比嘉中尉の、軍医の権化ともいうべき態度は、その後、米軍が上陸し日本軍が沖縄本島南部に敗退してまでも一貫して変らなかった。

しかし彼の誠実とも豪胆ともいえる仕事ぶりは、医局から応召して来た部下の見習士官たちには、“無謀”ともみられ、終始不平不満のたねになっているようだった。

「主任の忠勇ぶりには困ったものだ」とか、「軍医が死んでしまっては負傷兵の治療もできないではないか。医療関係者は、たえず安全なところにいなければならない」などの、この日聞かされた批判のたぐいを、その後も私はたびたび耳にした。(『陸軍嘱託歯科医の沖縄戦』二五頁－二六頁)

私は比嘉中尉の沈着な態度をあの時、見ただけだったが、行動をともにした平良君から、温厚篤実そして勇敢な人と評し、その態度の一貫してかわらなかったといっている。

六月十九日の未明、砲弾で負傷し、再び壕にひっかえしたとき、私は、比嘉軍医中尉に介抱してもらった。傷はあさい心配するなとはげまされたのが、中尉との最後の別れであった。中尉はその後、山城の峠を越して行って、丘の上で、最後の戦死をとげたようである。中尉の下には、上原きみ子という糸満生れの気丈夫な婦長がいた。六月十九日解散になり、比嘉中尉に看病された後私は三三五五砲煙弾雨の中に死の彷徨をつづけて行く生徒のあとを追うて、山城の坂にかかった。その時、翼の折れた鳥のように、友の肩によりすがりながら坂を登って行く上原婦長のやつれはてた姿を見た。

上原婦長は、比嘉中尉に看護されながら、最後の息をひきとったという。比嘉中尉も同じ場所で、敵弾に倒れたようである。

私は、戦後、比嘉中尉の遺族を探し求めた。大宜見君にも聞いたし、平良君にも聞いたが、越来にいるらしいというだけで、はっきりとつきとめることはわからず、いつのまにか、記憶からうすれて行った。上原きみ子婦長の遺族のことを上原当美子さんに尋ねたが、妹一人だけが生き残り家族は全滅したと聞いた。位牌は、妹が嫁先へも持って行けず親戚のところにあずけてあると聞いた。

三十三年忌に、陸軍病院本部で行われた軍医・看護婦の慰霊祭に、その妹を尋ねたが、慰霊祭には滅多に顔を出したことがないとのことで、とうとう会う機会をつかめなかった。先日、上原当美さんの話で、『沖縄の悲劇』を妹さんがほしがっていたので、あちらこちら本屋をさがして、やっとみつけてさし上げたとのことを知った。

比嘉中尉と上原婦長の霊前にはどうしても香をたき、お弔いをして、お礼を申し上げなければならないと、三十四年間も思いつづけながらはたさずにいる。

語るべき平良君を失ってしまった。傷病兵のために精魂を傾けて死んで行ったこれらの人々のことを語り合う人もいない。せめて、これら遺族をさがして、戦争中のお礼をいい、その功績を伝えてあげなければならない。戦のかげに、戦争中、これほどに傷病兵のため働いた者がすべて、地下に埋れて、くちはててしまうことは忍びがたい。戦争をのろうのあまり、人間のこうした行為をすべて、地下にうめつくしていいのだろうかという疑問がわく。

もしまたこうした行為をたたえれば、戦争へと人々をかりたてるようにも見られはすまいかという疑問がわく。

語るべきともを失った今、真情を語り合うことの出来ないさびしさがわく。

時が流れ、時代がうつりかわってしまう、とても後世の人々には、理解も出来なくなることばかりが多くなる。人間が過去の人間の心情を知り、その心中にせまることは、ほとんど不可能なことであろう。時がすぎるとともに過去の事実はやはり、歴史のそこにおしこまれてしか後がないという寂しさがひしひしとせまる。

現実に生きている親しい友人の間ですら、真情のそのままを伝えることは極めてむずかしい。ましてや時が流れ世がかわりへだたった人間同士が、理解し会うなどということは不可能であろう。

比嘉中尉について、遺稿には多くの箇所で、平良君は中尉を信頼し尊敬していたことがわかる。

とくにその最後はまことに悲壮に語られている。

（※読みやすさを考慮し、字句の訂正などを行った。）

本　棚

（琉球大学教授　仲程昌徳）

謝花直美『証言沖縄「集団自決」――慶良間諸島で何がおきたか』

沖縄戦をとりあげた図書があいも変わらず刊行され続けているということは、一体何を意味しているのだろうか。とりわけここ数年、沖縄戦記ブームではないかと思わせるほどの輩出ぶりだが、一体、なぜそれほどに、沖縄戦記が刊行されるのだろう。

その理由の一つには外間守善や、比嘉常吉といった学窓から戦場に引き出されていった世代が、一種の「自分史」をまとめ出したといったこと、あとの一つには三木健、菊池慶一といった一線を退いて時間的に余裕の出来た世代が、同世代の戦場体験や戦場の追体験をまとめ出したといったようなことがあろう。

そのような一種の「自分史」も、沖縄戦の聞き書き、遺骨収集の体験記録、さらには幼年の戦場体験の記録も、戦争と関る話――とりわけ沖縄戦と関る話は、沖縄戦の惨たらしさを取り上げていくことで反戦、厭戦の記録となっていたし、そこには、戦争体験の「風化」を押しとどめたいとする思いが込められていた。

しかし、ごく近年の沖縄戦と関る図書の刊行は、「風化」への危惧にとどまらず、さらなる大きな問題の出来と関わっていた。例えばそれは、宮城晴美の『母の遺したもの　沖縄・座間味島「集団自決」の新しい証言』が、版を新たにして刊行されたことがよく示しているように、命令の有無をめぐる裁判闘争及び歴史教科書の沖縄戦記述と関わるもので、謝花直美の『証言沖縄「集団自決」――慶良間諸島で何が起きたか』はまさにそれであった。

同書は、「はじめに」で、「文部科学省の二〇〇八年度用高校歴史教科書の検定」をめぐる経緯を簡潔にまとめ、そのあとに続けて「慶良間戦とは何か――沖縄戦最初の地上戦」「渡嘉敷島の証言――軍命で集合させられて」「座間味島の証言――忠魂碑集合のあとで」「慶留間島の証言――戦場をさまよう人々」「阿嘉島の証言――「集団自決」の寸前」の五章と「沖縄と本土――何が問われているか」の終章で構成されている。

慶良間諸島の「集団自決」をめぐる問題は、曽野綾子の『ある神話の背景』に発している。そして曽野の同書をめぐってこれまで数多くの論議がなされてきたわけだが、その後、「命令」の有無を巡って新たな事態が登場してきたことで、地元の新聞社は、すぐさま特集を組み、「慶良間諸島の戦争体験者三七人」からの聞き取りを連載して行った。その連載記事を「大幅に再構成」したのが本書であるが、体験談を話してくれた「約半数の方が、みずからの体験を初めて話した人だった」という。

これまで黙していた人々が、それぞれの体験を語り始めたことで、新たに浮びあがってきた出来事とともに、慶良間の戦いを体験した人々が、何を語ろうとしたかを本書は鮮明にした。それは「軍が渡した手榴弾が住民の「集団自決」で使われた。それでも軍の責任は、軍命は、なかったと言えるのだろうか」（新崎直恒）といった発言、「教科書から事実を消すのは絶対反対だ。あんな惨酷なことがあるのが戦争だ。子や孫たちに伝え、二度と戦をさせてはいけない」（宮平春子）といった発言、「支給の竹槍も個人所有ではなく、国の物、天皇陛下の物、大切に扱えと言われた。戦争と聞くと、すぐに鬼畜米英を想像した。教えられるがままの教育だった」（宮里哲夫）といった発言からわかるように、今、国がなそうとしている施策や教育、歴史教科書の記述をめぐる危機的な情況の現われに対するやり場のない憤怒に他ならない。

そのことでいえば、戦記の輩出は、不幸な時代を象徴しているとも言えるであろう。

■昨年６月にふたりめの「説明員」となった当館説明員尾鍋拓美の１年を振り返っての感想を皆さんにお伝えします。

―― 来館者の一人ひとりが記憶の伝え手に ――

ひめゆり平和祈念資料館　説明員　尾　鍋　拓　美

2007年５月より、２人目の説明員として働き始めて、１年が経とうとしています。今年１月から館内での説明を始め、早くも５ヶ月が過ぎました。

この間、戦争体験者の言葉の重み、人をひきつける力を感じた光景にあいました。

今どきの、いわゆる「ギャル」と呼ばれるような女の子たちが、館内で証言員（ひめゆり学徒生存者）が戦争体験を語っているのを、最初は「なんだろう？」という様子で聞いていたのが、だんだん表情を硬くし、最後には涙を流しながら、証言員を見つめていました。戦場を体験した人が目の前で体験を話してくれるということは、とても心が揺り動かされる体験なのでしょう。来館者の感想文を読むと、体験者から直接戦場の様子を聞くことで、それまで遠かった「戦争」が少し身近なものになり、「戦争」や「平和」を考え始める契機になり、再度、あるいは何度も資料館に足を運んでもらうきっかけになっていることが伝わってきます。

このように書くと、「やはり戦争体験者しか戦争の実相を伝えることはできないのではないか」と思われるかもしれません。実際私も展示室内に立っていると「私は何を伝えればいいのだろう」と考えこんでしまうこともあります。しかし、そんな時、展示室に立っているからこそ勇気付けられることがあります。それは来館者の方々が、「戦争の記憶の伝え手」となっている光景に出会えるときです。

資料館という「場」を通して、来館者がそれぞれに戦争やひめゆり学徒隊、沖縄戦について一緒に来た方と話をしているとき、何度も来ている方が初めて来る方に、説明しながら見学しているときなど、数々の「話す」「伝える」という場面を見ることができます。そのような光景を見ると、「『継ぐ』のは私だけではない。資料館にいらした方一人ひとりが、沖縄戦の記憶を継いでいくのだ」と感じて、力づけられます。

また、第三外科壕の実物大模型のところで「水などはつるべを使っておろしていた」という説明をした時のことです。聞いていた小学生の男の子が、それをお父さんに伝えているのを偶然耳にすることができました。その時、私の仕事は、知識を貯え、伝えることで、次の「受け継ぐ人」を生み出していくことなのだと嬉しく思い、同時に、あらためて自分が担う仕事の大きさを感じました。

これからも、証言員から話を聞き、来館者のみなさんとのやりとりを通して、説明員として成長していきたいと思います。来館者の皆さま、館内で私たち説明員を見かけたら、お気軽に声をかけてください。

相思樹

県内の生徒たちの見学風景

ひめゆり平和祈念資料館　説明員　仲　田　晃　子

四月、五月は県内の学校の生徒たちが多く入館する時期です。遠足の日程のなかに当館の見学が組まれているようで、生徒たちは午前中の一、二時間を当館で過ごします。県内の生徒で特に多いのは小学生です。小学生は展示の内容を全体的に追うというよりは、興味を持ったものを好きなように見学しています。

展示室を進むと、証言映像と、証言を載せた大型の本の展示があります。証言映像は普段子どもたちがテレビで見ているような説明や演出効果が多い映像とは全く異なります。証言員が体験を話している姿が中心の映像ですが、何十分もじっと見ています。また、証言の本に張り付くようにして読んでいる生徒も多くみうけます。活字離れが進んでいるといわれていますが、どんどん集中して証言を読んでいく生徒たちの姿を見ると、出来事を伝える言葉の力について改めて考えさせられます。

生徒たちは、沖縄に生まれたり沖縄で生活しているからといって沖縄戦のことをよく知っているわけではありません。沖縄戦はいつ始まったのか、どこから米軍は上陸したのか、なぜ平和の礎は摩文仁にあるのかを知りません。また、展示をよく見ているようでも、沖縄戦が今の沖縄や自分とどのように結びついているかよくわからないようです。少し話をすると遠い昔のことのように感じていることもわかります。

そんな生徒たちに、一フィートの写真がどこで撮られたものか、ひめゆりの学校はどこにあったのか、先週撤去していた不発弾はどこからきたのか、基地はいつから沖縄にあるのか、といった身近なことと結びつけられるような話をするようにしています。ほんの少し話をしたら質問攻めにあったり、ちょっとした意見や感想などの反応が返ってきます。またそれに応答するのは難しいことが多いのですが、その難しさも含めて、展示室に立つことの面白さを感じています。

声

学ぶ機会を与えてくれる資料館

埼玉県　教員

昨年、初めて貴館を訪れました。今までなんとなく知っているつもりでいましたが、こんなにもむごく悲惨な出来事だったのかと大変な衝撃を受けました。何故？　という思いで、仲宗根先生はじめ、様々な方の手記も読ませて頂きました。

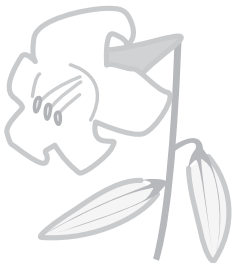
同行した娘も心に感ずることがあったらしく、沖縄から帰ると、証言集や本や映画を熱心に見ていました。そんな経験から、今年の夏、ずいぶんと時間をかけて読書感想文を書きあげました。

私は、知的障害の養護学校で教員をしております。今年の５月には修学旅行でも沖縄に来ました。昨年の経験から長い時間をかけて平和学習に取り組みました。当日は佐喜眞美術館、平和祈念公園、平和祈念資料館をまわり、ひめゆりは前で手を合わせるだけになってしまいましたが、沖縄戦の勉強と現地での見学は知的障害のある生徒にも大きな衝撃となって心に残ったようです。

秋の文化祭では、沖縄の平和と文化をテーマにステージ発表をし、今までにない舞台を創りあげてくれました。沖縄の方々の平和を強く願う心が子ども達を大きく成長させて下さいました。

こうして、私たちにも、生徒にも、そして我が子にも、ご自分たちのつらい経験をもとに、学ぶ機会を与えて下さっている皆さんに感謝しております。

言葉にすればするほど、うまく気持ちが伝わりませんが、皆さんの尊いご活動を陰ながら応援させて頂きます。そして、教師としても、平和の大切さを子ども達に伝えていきたいと思っております。



ひめゆり平和祈念資料館　資料館だより　第 41 号
2008 年（平成 20 年）5 月 31 日発行
編集・発行　（財）沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会立ひめゆり平和祈念資料館
資料館（〒 901-0344　沖縄県糸満市字伊原 671-1　☎ 098-997-2100　fax098-997-2102）
同窓会（〒 902-0067　沖縄県那覇市安里 388-1　☎ 098-884-1115　fax098-884-3355）
URL　http://www.himeyuri.or.jp/